とやま農（みのり）プロジェクト

川の道をつくり、まちが活きる願いを込めた 常願寺川流域の今と昔の水の利用と農業を子ども記者が徹底調査！

立山小学校編

両岸分水工は常願寺川流域の農地を公平に潤す役割があるんですね！

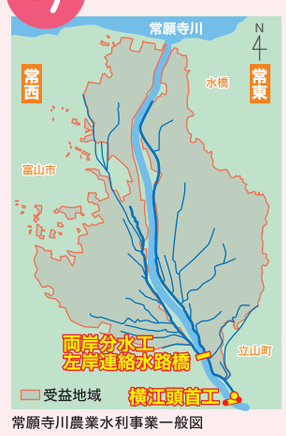
きれいな田んぼの秘密とは!?

私たちの生活に潤いをもたらす農業用水について調べてみました

農業用水は「田畑のかんがい」での使用を本来の目的としていますが、実際は農作物や農機具の洗浄、防火・消雪などにも利用されていて、時代が流れるにつれ、上水道や発電など、より幅広く生活に役立つようになりました。ただ、**今はいつでも便利に使える用水ですが、昔は当たり前のことではなかったのだとか。**その歴史を、しっかり調べてみました。

こんな造りになってるんだ～

今 常願寺川沿岸の用水路配置図



常願寺川農業水利事業一般図

常願寺川沿岸の用水路は、常願寺川の豊富な水を安全に地域のすみずみにまで届けられるように配置されています。そのおかげで農業を安定的に行うことができ、美しい田園風景が作り出されています。

Q1 常願寺川の困りごとは洪水だけじゃなかった？

A1 1665年（寛文5年）には「常願寺川が農業用水として使われていた」という記録が残されていて、その使い方を調べると、昔の人々は、富山市側（左岸）に6か所、立山町側（右岸）に7か所、**集落それぞれが簡単な施設を作って、常願寺川から直接田畑に水を引いていた**のだそうです。ただそれは、他の集落を気づかうような施設ではなく、常願寺川そのものに**水が少ないときは、集落同士の争いが絶えなかった**そうです。これは、大量の土砂が流れ込む急流河川ならではの水害と並び、人々を苦しめる悩みの種として、長い間課題とされてきました。

Q2 今の常願寺川流域で安心な農業ができる理由は？

A2 「安政の大地震」から33年後、明治政府が派遣したヨハネス・デ・レーケさんの指導のもと、常願寺川の洪水被害を抑えるための大治水事業が行われました。その時に**「堤防」と左岸（富山市）側6か所に分かれていた取水口をまとめる「常西合口用水」をつくることで、下流まで安全で公平な水の流れを確保しました。その後、1952年（昭和27年）に「横江頭首工」ができ、右岸（立山町）側7か所の取水口も「常東合口用水」にまとめ、「両岸分水工」から農業用水を分け合うようにしたことで、扇状地全体に安全に、そして平等に水が行き渡るように**なりました。ちなみに「常西合口用水」に水を送る方法は、「左岸連絡水路橋」を渡らせる形に変えていて、今の水路になるまでに60年以上の時間をかけたことになります。ただ、長年の活躍で施設は痛み、上流での崩壊地も増えていて、構造強化と洪水流下能力の拡大、管理システムの更新など、改修と改良を続けているそうです。

実際にどうなっているのか見学しに行ってこよう！

check! 常願寺川の東と西に安全にバランスよく水を届ける「両岸分水工」のこと、教えます。

両岸分水工の正面に立つと尖山（とんがりやま）がキレイに見える！

そうだったんだ！常願寺川

常願寺川流域の農業を支えている両岸分水工や連絡水路橋を調べてみました。

富山市、立山町、舟橋村の農地に行き届く恵みの水

富山市方面に流れる「常西合口用水路」と、立山町や舟橋村に向かって流れる「常東合口用水路」に**農業用水を配分する「両岸分水工」ですが、その比率は、合計14本の出口からの交互の配水で実現する完璧な「5：5」です。ここまでの気配りには、かつて多くあった水利争いを完全に防ぐ効果もあります。**そして、常に安定した量が行き渡るようになった農業用水は、かんがい利用だけでなく、消雪・防火用水など、地域生活の安全のためにも、幅広く使われています。水路の管理や改修については、各農家や、農家を組合員とする団体・土地改良区を中心に行われていて、先人の努力の積み重ねで誕生した「恵みの水」のある環境を大切に維持しています。また、用水の用途は現在、発電や上水道にまで広がっていて、まさに私たちの豊かな生活にいたるところで、直接的な恩恵をもたらしてくれています。今や私たちの生活に欠かせない、東西の合口用水路からの「水の恵み」。この先もずっと安心して使っていけるように、先人から受け取ったバトンを地域のみんなで未来へとつないでいく、それぞれの努力が大切です。

お話を伺った常願寺川沿岸用水土地改良区連合事務局長 山本さん

機能と芸術を両立した「左岸連絡水路橋」が美しい

頭首工から伸びる太い水路の3キロ先にある分水工の足元には、穏やかに制御された「常願寺川」が。大量の水を14口で均等配分する**施設の正面に立つと、水路越しに「尖山（とんがりやま）」の頂上、その真後ろに薬師岳の雪化粧がお目見えします。また、アーチ形の「左岸連絡水路橋」のガード部分には佐々成政氏の家紋を模した穴を設け、日差しを通した美しい見栄えも実現しました。**これらは「せっかくの景観に溶け込むように」という、作り手のこだわりです。

私たち立山小学校子ども記者が調査します！

次はここの水でどんな農作物が作られているか見よう！

/// 取材を終えて / 立山小学校6年生 ///

両岸分水工の役割に驚き！

「両岸分水工」を見たのは2回目ですが、しっかりと役割の説明を受けたのは今回が初めて。立山町にとっても大事な場所がここにあることに驚きました。迫力もそうですが、**正確に水を運ぶための色んな工夫がもっとすごくて、次はまだ行ったことのなかった「横江頭首工」を見てみたいと思いました。**

私の家は農家で、お父さんとおじいちゃんのお手伝いも好きでしていたので、ももやりんごが立山で作られていることは知っていました。でも、はじめて知った**「たてやま営農組合」では、もっといろんな品種の作物を作っていることを知れて、大きな果樹園にもびっくり！改めて農業っていいなと思えました。**

お米も果実も実るのが嬉しい！

地域農業を未来につなぐ たてやま営農組合の役割

農事組合法人「たてやま営農組合」は先祖代々受け継がれてきた立山の農地と農業を守るために、1996年（平成8年）にできました。地元農家18戸が参加しているそうです。**組合は購入や維持にお金がかかる農業機械を管理し、年間計画を立て、農産物の生産から販売までを行うことで、たくさんの効率化を図っています。**そうやって農業を「しっかり利益の出る」お仕事として成り立たせています。

おいしいリンゴを頂きました！

「たてやま営農組合」では、もともと盛んだった稲作を中心に、育苗、大豆、里芋、もも、りんご、ぶどう、いちごなど、一戸単位では難しいとされる作物の栽培にも積極的に取り組んでいます。組合の敷地には大きなビニールハウスや果樹園もあり、本部の前では採れたてのりんごの販売もされていました。実は最近、日本中でお米が余っていて、お米以外の作物を作るか、休ませるしかない農地があるそうです。昔は洪水や土砂災害でなかなかお米が取れなかった「常願寺川」のことを考えると、**今の一年中いろんな作物が栽培できる環境が、多くの人たちの努力や工夫のおかげで成り立っているんだなと実感できます。**

お話を伺ったたてやま営農組合事務局長 坂井さん